

第 2 部 【講演】 2025 年 11 月 7 日(金) 13:30~15:00

[稲川校長]

本日の講師、植木朝子先生をご紹介します。

植木先生は東葛飾高等学校 1982 年入学、1985 年 3 月卒業の第 57 期で、皆さんの大先輩です。

本日は創立 100 周年記念行事ですが、植木先生の在学中、創立 60 周年の記念式典がありまして、創立 60 周年記念祭生徒発表会で、先生は生徒代表として素晴らしいチェンバロ演奏を披露され、大喝采を受けたと思います。

1985 年 3 月の卒業の後、お茶の水女子大学文学部国文科入学。大学院に進まれ、比較文化学専攻博士を終了。同大で 1998 年人文科学博士号を取得。

十文字学園女子短期大学助教授を経て、2005 年から同志社大学文学部国文学科助教授、2007 年から同志社大学文学部国文学科教授を務めておられます。

ご専門は日本中世文学。梁塵秘抄などの中世歌謡がご専門ですが、中世歌謡を起点に、古代から近現代に至るまで幅広い論考を繰り広げられています。

また、宝塚歌劇にも深い造詣をお持ちでいらっしゃいます。

2020 年 4 月から同志社大学の第 34 代学長、同志社大学では初の女性学長として、2025 年 3 月まで 4 年間務められました。

2023 年から日本学術会議会員でもいらっしゃいます。

本日は、創立 100 周年を記念して、「私的東葛論：はじまりの場として」と題してご講演をいただきます。生徒の皆さんにとって、高校時代のご経験や、大学で学ぶということは、ことは、これからも予測困難と言われる時代に対応していくにはどのような力が必要となるのか、植木先生のご経験やお考えを伺うことは、またとない貴重な機会になると思います。

それでは、植木先生、どうぞよろしくお願いいたします。

[植木朝子氏]

ただいまご紹介いただきました、植木朝子でございます。

東葛飾高等学校創立 100 周年まことにおめでとうございます。記念すべき節目に、このような機会をいただきましたこと、大変光栄です。ありがとうございます。

それにふさわしいお話ができるかどうか、はなはだ心もとないですが、

本日は「私的東葛論：はじまりの場として」と題してお話しさせていただきます。



まず、はじめに自己紹介をいたします。先ほどもご丁寧にお伝えいただいたのですが、私は1985年3月に東葛飾高校を卒業しました。1年浪人して1986年にお茶の水女子大に入学し、さらに大学院に進学して修士課程・博士課程と進んだ後、1年母校で助手をつとめ、1996年から埼玉にある十文字学園女子短期大学に勤めました。2005年に同志社大学に着任し、文学部長、副学長を経て、ご紹介いただきましたように、2020年4月から2024年3月まで学長をつとめました。

本日は東葛飾高校在学時代のこと、大学で学ぶということ、社会を牽引していく皆さんへのメッセージ、という流れでお話しいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは私の高校時代ですが、入学してすぐ、大きな衝撃を受けました。

授業が分からないのです。特に数学です。中学生の時から得意というわけではありませんでした。本当にチンプンカンプンで目の前が真っ暗になりました。中学生の時は一応、成績優秀な生徒だったわけで、授業についてゆけないということには大きなショックを受けました。ならば、勉強以外の何かがあるのかと言えば、何もありません。まわりを見ると、同級生たちはみな、自分の世界を持っていて、とても大人びていました。自分はなんと幼く、つまらない人間なのだろうと、すっかり意気消沈してしまった記憶があります。こうして挫折し、己を知るということは苦しいことではありますが、生きていく上では避けられないことのように思います。よかったですと思える時がやがて訪れると思います。

私は大学で日本文学を教えているので、本日のスライドでは、各学年の国語の教科書に載っていた作品で、印象に残っているものをあわせて紹介しています。2023年から国語の教科書がだいぶ変わったので、皆さんはもしかしたら同じ作品を読んでいないかもしれませんが、高校1年生の時、芥川龍之介の

「羅生門」の授業がありました。極限状態におかれた時、人は自分のことしか考えられないという、利己主義、エゴイズムについて描いた作品ですが、幼稚だった私は、これが大変なショックで、自分にそういうエゴイステックな部分があると認めたくなかったんですね。それで、「一体どうしたらいいのだろう、エゴイズムを隠して生きていくしかないのか？」というような、本当に幼い感想文を提出したら、国語の山田先生からそれが返ってきて、「隠す必要はない、自分の中にあるエゴイズムを認め、それと向き合うことが重要だ」といったようなコメントが書かれており、とても感激しました。それは己を知ることであり、やはり苦しいことではありますが、エゴイズムと向き合うというのは、今も折に触れて反芻する言葉です。



入学後の衝撃を超えて、1年生の時の私にとって重大だったのが、演劇部で活動したことです。私の学年の部員が1人しかいなくて、同級生だったその部員に誘われて参加しました。同じクラスのもう1人も加わって、3人だけでできる芝居を探し、取り組んだのが、松本和子作「眠れる子工」という作品でした。タイトルロールの子工は、交通事故にあって意識の戻らない小学生ですが、舞台には出てきません。登場人物は子工の母と事故を起こした加害者の女性、そして子工が入院している病院の看護師の3人です。私は子工の母の役だったのですが、この作品には、被害者の苦しみ、加害者の苦しみのそれぞれが描かれ、簡単に善悪を定めることはできません。演じることは、他者への想像力を養うことに繋がります。もちろん、皆さんが全員、役者として舞台に立つ機会を持つかという、なかなかそうはいかないと思いますが、たとえば小説や戯曲を読むことによって、私たちは自分以外の人の人生を生きることができます。そういう経験はとても大切だと思います。

2年生で恋をしました。相手は1年下の学年の人でしたけれども、今でも鮮やかに覚えている場面があります。体操服の色、今もそうだと思いますが、学年によって違いますよね。青と緑と赤ですね。私の学年は

青で、その人の学年は赤でした。ある日、クラス教室棟と特別教室棟をつなぐ空中通路から下を見ていたら、赤の体操服の集団がこちらに向かって歩いてきました。その集団の中にたまたまその人がいて、私は通路から手を振ってみたんです。きっと恥ずかしがって振り返したりしないだろうなと思ったのですが、その人は手を振り返してくれたんですね。たったそれだけ、たったそれだけのことが本当に嬉しくて、ああ、こういうキラキラした瞬間のために、いくつもの眠れない夜や、ため息や涙に閉ざされた長い時間があるんだなと思ったんですよね。

他者との距離を縮めていくということは、自分も無傷ではいられないということです。喜びも味わうけれども、苦しみも味わう、改めて他者を知り自分を知る経験だったと思います。

さて、2年生の時の国語の教科書には、中島敦の「山月記」が載っていました。

「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」という非常に有名なフレーズがあります。普通、「自尊心」は「尊大」と結びつき、「羞恥心」は「臆病」と結びつくと思いますが、それが逆なんですね。自分は価値がある人間だと思う自尊心が強いあまり、それを傷つけられるのが極度に怖くて、他者と交わることに臆病になってしまう、そして一方では、自分つまらない人間だと自分を恥ずかしく思う羞恥心が強いあまり、それを指摘されないように、偉そうに尊大に振る舞ってしまう、そのことが主人公を苦しめるわけです。多くの人が思い当たるところがあるために、この言葉が広く支持されているのだと思います。苦しいのは自分だけではないと思うことが、私たちを救ってくれることもありますね。

3年生の時は、高校生活最後ということもあって、1年生、2年生の時以上に行事の盛り上がり印象に残っています。合唱祭は、全学年クラスを通して順位をつけますよね、今もそうだと思うのですが。私の所属していた3年D組は優勝しました。また、スポーツ祭は学年ごとに順位をつけますね。D組は複数の種目の結果を合わせて総合優勝でした。文化祭I部では、3人の友人たちとピアノ連弾のコンサートをし、II部のクラス発表では、アガサ・クリスティの「そして誰もいなくなった」を上演しました。これは、閉ざされた空間の中で、童謡の歌詞に合わせるようにして、次々人が殺されていくという推理サスペンス劇ですが、私は、最後まで生き残る、セリフが多くて大変なヴェアという女性の役を演じました。

本当に楽しく、完全燃焼の最終学年だったのですが、こんなふうに楽しく行事に没頭していれば、当然のことながら勉強がおろそかになってしまいます。私の父は、このように楽しく過ごしている私について、人生をなめきっている、浪人して勉強した方が良く考えたらしく、現役の時は第1志望1校しか受けさせないという方針でした。それで、お茶大だけ受けたのですが、当然、落ちました。私自身も分かっていたので、悲壮感はなく、予定通り予備校通いの1年を過ごしました。

浪人して予備校に通うことができるというのは大変恵まれた環境です。色々な事情からそれが許されない人もいますでしょう。私は行事の方が受験勉強より大事で、さらに浪人が可能だったので、好き勝手ができました。ですから偉そうに言う資格はないのですが、環境の制約をひとまず置いておくと、何に価値を置くの

かというのは、1人1人の責任による選択であって、まさに東葛が掲げる自主自律に繋がるのだらうと思います。

3年生の時は、教科書に「陰翳礼賛」が載っていた関係だったか、谷崎潤一郎の作品について、なぜか私が国語の授業時間を使って、発表することになったんですね。それで「刺青」―入れ墨ですね―とか、「痴人の愛」とか「春琴抄」などを読みまくった記憶があります。美に耽るという意味の耽美派の文学というのは、マゾヒズム、サディズムなど、倒錯した性愛の世界も描かれ、道徳的に正しいとは言えないところもあります。ただ、正しくないことに惹かれてしまう人の欲望を、現実世界ではなく、文学の世界で満たすことが、ある歯止めになったり、また別の表現に昇華されたりする可能性もあります。たとえば、残酷なゲームが現実世界における暴力の導火線になるといった危険性も指摘されている中、バランスが難しいのですが、人の暗黒面を一切見ない、無いものにする、というのも問題です。先ほどのエゴイズムと同じように、隠すのではなくて向き合う、ということかと思います。そしてもちろん、向き合って、さらにどうするか、不断に考え続けなければいけません。

このように苦しかったり落ち込んだりしつつ、それを含めて本当に楽しい3年間を過ごしました。母校に対しては感謝の気持ちでいっぱいです。

今、学年ごとに自分にとっての大きな出来事をお話しましたが、さらに小さな出来事を少し付け加えたいと思います。

まず、交換日記。友達と交換日記をしていました。1冊のノートを一方が持ち帰り、何か書いて、次の日に学校で相手に渡す、渡された相手がそのノートを持ち帰り、家で何か書いて、次の日学校で相手に渡す。そういうことを繰り返すわけですね。2人でもできるし、3人でも4人でもできますが、私は2人でしていました。ノートではなくて、ルーズリーフに手紙を書いて渡すこともよくしていました。ルーズリーフの手紙は、結び文みたいにする綺麗な折り方が色々あって、そういう手紙のやりとりなどもしていました。皆さんは、なんて古臭いんだらうと思うと思いますが、昭和の時代はそうだったんですね。皆さんならLINEですよ。交換日記や手紙とLINEとの大きな違いは、時間のかかり方です。LINEなら一瞬のところ、交換日記や手紙だと、書いたものを自分の手元に置いておく時間があります。置いてあると見直しができます。自分で書いたことを読み直して自分で書き直せるわけです。LINEは、ほぼ反射的なやり取りですよ。スピード優先で、言葉が十分に吟味されていないことも多いのではないかと思います。まさか、交換日記に戻りたいと申し上げるつもりはありませんが、自分の書こうとすること、つまり、発言内容をちょっと立ち止まって考える、ということは、とても大切だと思います。

掃除当番を巡る攻防。何の話？と思われると思いますが、ある女子生徒、彼女はちょっとやんちゃな人で、掃除当番なんかもうどんどんサボるんですね。で、当番にも関わらず帰ろうとしたら、真面目な班長さんの男子生徒が、「○○さん、掃除をしてください！」と言って、箒を持って追いかけて、とうとう彼女は捕まっ

てしまいました。しかたがないから、嫌々戻ってきて掃除をしたのです。その彼女が、注意した班長さんについて、「もう、憎たらしいなあ、いつか上履きのかかとを踏んづけて転ばせてやる！」って言ったんですね。復讐の方法として、上履きのかかとを踏んづけて転ばせてやるって、何て素晴らしい表現なんだろうと、私は本当にその時感心したのです。すぐリアリティがあるし、でもユーモアもありますよね。実に絶妙な表現だと思ったんです。「上履きのかかとを踏んづけて転ばせてやる」という表現によって、彼女は彼女なりの怒りの度合いを表現し、自分を納得させたわけで、本当にそんなことはしないと思うんですね。そして周りは大笑いして、雰囲気が一気に和みました。ちなみに、その彼女と、何十年ぶりに再会した時に、私はこの表現にすごく感心したんだと言ったら、本人はもちろん全然覚えてなくて、しかも、「そんなくだらないことを覚えている脳みその容積がもったいない」と言われてしまいましたけれど、私にとっては、他のものを忘れても、それは忘れたくない、非常に貴重な素晴らしい表現だったのです。今、何かといえば、すぐ「死ぬ！」とか、「超ムカつく」とか、とても乱暴な言葉、粗略な一語で全てを済ませてしまい、時には言葉にさえしないでひどい行動に及び傾向があるのを危惧しています。ユーモアのある言葉が、緊張した場面の救いになるということの一例です。

ホールズの包み紙の折り鶴。また謎の言葉を出してしまいましたが、ホールズってスーツとするキャンディは皆さんご存知ですか？ 高校生の時って、眠くて仕方がなくて、よく眠気覚ましにホールズをなめていました。今日のお話のために調べてみたら、公式ホームページによると、1980年に日本に登場したとのこと、私が在学していた頃は、ちょうど発売後少し経って、人気が出始めた頃だったようです。つい先日、確認のために買ってみると、そのキャンディは長方形になっていて、そして包み紙には字が入っていたんですけども、かつては、キャンディは正方形で、包み紙は透明な少し厚めのものでした。それがおしゃれで素敵だったのです。ある日、私がとても落ち込むことがあって元気をなくしていた時、短い休み時間にお手洗いに行き戻ってきたら、机の上に、その透明のホールズの包み紙で折った小さい小さい折り鶴一よく折れたなと思いますが一が置いてあったんです。

びっくりして、周りを見回して、「これ、折ってくれたの、誰？」と聞いたけど、みんな知らなくて、でも、私はちょっと思い当たる人がいて、その人と目が合ったら、にやっと笑って、でもそれっきりだったんですね。だから、私もそれ以上は何も言わず、ただ誰にともなく「ありがとう」と言って終わりました。非言語コミュニケーションなどという大袈裟なのですが、言葉ではない、こんなどうでもよいようなささやかなことが、その時の私の心には、本当に沁み込んだのです。その人の優しさだったと思います。

算数セット事件。これは私が勝手に名付けている事件なのですが、高校3年生の秋頃、柏駅から学校まで歩いている途中に、向かいから来た小学生が、私の目の前で転んでしまい、手に持っていた箱の蓋が開いて、中身が道にこぼれてしまったのです。いわゆる算数セットで、皆さんは使わなかったかもしれないですが、数を数えるために使うおはじきとか、棒とか、定規とか、そういう細々したものが入っていました。その子は慌てて拾い集めようとしているのですが、かなり広範囲に広がっていたので、ちょっと大変だったんです。それで、私も一緒に道にしゃがみ込んで拾い集めていたら、私たちを通り越して学校の方に歩いていく背中があり、それは同級生の男子でした。手伝ってくればいいのに、なんで追い越していつちゃうだろうと、

その時は思ったのですが、小学生のその子と私で、すぐ拾い集めることはできて、私は学校に行きました。したら、通り過ぎていった男子が、窓際に立って、私が教室に入ってくるのを見張っていて、まっすぐ私の方に歩いてきて、「植木さん、さっき小学生の落としたあの荷物拾ってあげていたよね、優しいよね」と言ってくれたんですね。ちょっといやらしいですが、なにか良いことをした時、善行を積んだ時、誰かが認めてくれたら嬉しいですね。良いことは人知れずするべきなのかもしれませんが、認めてもらったことが嬉しくて、わざわざそのことだけを言いに来てくれたんだなと思って感激しました。

このように自分が印象に残っていることを挙げてみると、改めて色々なやり方で色々な人たちと、ごくさやかなものも含めて、東葛では様々な出会いと交流があったのだなあとと思います。そしてむしろそのごくさやかなひとつひとつが自分にとって救いになったし、今も支えになっていると感じます。

次に、私は今、大学で学生たちに教えているという立場から、大学で学ぶということについてお話ししたいと思います。多くの皆さんにとって、数年後の近い未来のお話です。もちろん大学進学が全てではありませんが、ここでは仮に大学という場を設定して、高校までとは違う学びの形についてお話ししたいと思います。

大学での学びは、今皆さんが取り組んでいる勉強とは少し違います。今は、答えが1つに定まっている問題を出されて、それを解いていると思いますが、大学では自ら課題を設定し、複数の方法で複数の解決の道を探らなければいけません。柔軟性と多様性が求められます。そして、常に常識を疑うことが必要です。「これが当たり前」で終わってしまったら、新しい発想、独創性は出てきません。ただし、ここで強調しておきたいのは、知識がなければ独創性も生まれないということです。自分が新しい良いことを思いついたと思っても、いままでに誰かがそのような考え方をすでに示しているかもしれません。私の分野で言うと、『源氏物語』などは鎌倉時代から研究されています。今、『源氏物語』を読んでいて、この場面はこんなふうには解釈できるんじゃないかという良いアイデアを思いついたとしても、それは鎌倉時代から現代に続く様々な研究を知っていないと、自分の思ったことが新しい発見であるとは言えないし、もし知らないまま言ってしまうたら大恥をかくこととなります。学校での勉強に関して、最近アウトプット—自分の意見を外に出すこと—が重んじられています。それはもちろん大事ですが、それは確かなインプット—自分の中に入れること—があってこそことです。たくさんの知識を持っていてこそ、社会の常識や通説に疑いの目を向けられるのであり、乏しい知識や教養で偏った自己主張することほど危険なことはありません。皆さんは日々勉強していて、こんなものを覚えて何の役に立つの？何の意味があるの？と感じることもあるでしょう。しかし、そうして得たものが論理的な思考力や豊かな表現力を育む肥やしになります。ぜひ多くのことを学び、身につけてほしいと思います。

さて、さらに、自分の考えを「○○ではないか？」という仮説にしてみて、その仮説に対して不断に検証し続けなければなりません。たとえば、条件を変えて実験してみるとか、予想される反論に対して、どう答えたら良いかを考えるとか、そこには客観性と批判性が必要です。自分がこう思ったからこうなんだ！という主観ではなく、客観的な証拠を示さなければなりませんし、自分の説、考えを批判的に見ることをしなければ

なりません。これは、生成 AI の間違いやフェイクニュースなど、今、私たちが日常的にさらされている問題に適切に対応することにも繋がります。

皆さんはすでに生成 AI に色々な質問をしているでしょう。よくご存知だと思いますが、生成 AI がもっともらしく答えている中には全くの嘘も含まれます。生成 AI を使ってもいいですが、信頼できる別のもので確かめる必要があります。

また、大事なことは、長期的なビジョンを持つということです。曖昧さと長い時間に耐えるということですね。人文学や理系分野の基礎研究は役に立たないのではなくて、役に立つのに時間がかかるだけです。今はタイパという言葉が大流行で、すぐに役立つことが求められますが、簡単に手に入れたものは簡単に失います。すぐに役立つものはすぐに役立たなくなります。受験勉強も同じです。

さらに言えば、そもそも役に立ってなんですか？

2011 年の東日本大震災発生 3 日後、インターネットで「今、必要なものは？」というアンケートを取った人がいます。答えはなんだったと思いますか。今必要なもの。1 項目は水と食料、2 項目は正確な情報、そして 3 項目はなんと、歌だったそうです。それで、そのアンケートを取った人は「アンパンマンのマーチ」と「上を向いて歩こう」をネットで流したそうなんです。こんな風に多様な役立ち方があります。ですから、役に立つという言葉ひとつをとってみても、あるひとつの価値観、ひとつの考え方だけで全てを塗りつぶさないように、皆さんにはこれが当たり前だと言われていることに疑問を呈し、多様な価値観や考え方を尊重できるようになってほしいと思います。

最後に、私が最も大事だなと思うことは、今お話した多様な価値観、多様な考え方と繋がることです。広い視野を持つということです。ダイバーシティ・インクルージョン・エクイティの推進について、これからの社会のリーダーとなっていく皆さんにこそ伝えたいと思います。これについてはまた後ほど触れます。

大学で学ぶということについて、いったんまとめます。受験勉強を含む、今の皆さんの学びは、当然ながら大学の学びと繋がっています。なんでこんなこと覚えなければいけないのかな、とちょっと嫌になってしまうこともあるかもしれませんが、知識のインプットは広い視野と独創性の獲得につながります。

そして、皆さんは問題がうまく解けなかった時、なぜ間違えたのか？と考えと思うのですが、それは客観性や批判性を育むことにつながります。そして、たとえばこの大学でこういうことを勉強したい、将来はこういう分野で働きたいといった目標に向かって進むことは、さらに長期的なビジョンを描く力に繋がります。その最中にある時にはなかなか気づかないかもしれませんが—そして私も偉そうには言えないのですが—無駄なことはありません。遠回りに見えても、皆さんが真剣に取り組んでいる事柄や取り組むという姿勢自体、どこかで皆さんを支える力になっているはずですよ。

3 点目に、社会を牽引していく皆さんへのメッセージをお伝えしたいと思います。

ここで小話を 1 つ申し上げます。皆さん、情景を思い浮かべながらお聞きください。

5月のある晴れた日曜日、お父さんと5歳の男の子が散歩に出かけました。公園に行く途中、2人は事故に遭い、お父さんと男の子は別々の病院に運ばれました。男の子が運ばれた病院の中から外科医が出てきて言いました。「この子は私の息子です」

この話を聞いて、おかしい、話が成り立たない、と思われた方いらっしゃいますか？この話自体もう知っている、種明かしを知っているという人もいるかもしれませんが、お父さんは怪我をしていて、男の子とは別の病院に運ばれたはずなのに、なぜ男の子に運ばれた病院の中からお父さんが元気に出てくるんだ？と思われた方、いらっしゃるのではないのでしょうか？

それは、外科医＝男性という思い込みがあるからですね。男の子が運ばれた病院の中から出てきた外科医は女性で、男の子のお母さんだっただと考えれば、何の不思議もないわけですが、この話で混乱してしまう場合があるんですね。

外科医＝男性といったような無意識の偏見をアンコンシャス・バイアスと言います。あの人はA型だから神経質だ、外国人は自己主張が強い、お茶出しは女性の仕事、女性は気遣いができる、育児中の女性には負荷のかかる仕事は無理だ、女子＝文系、このような思い込み、決めつけを、ついしてしまっていないでしょうか？特に、女性は気遣いができるとか、育児中の女性には負荷のかかる仕事は無理だというような事柄は、一見、女性を褒めていたり、女性に対して配慮したりしているように見えます。しかし、実は気遣いができるはずだという、理不尽な圧力になっていたり、仕事のチャンスを奪うことになっていたりして、当の女性のためになっているとは限りません。このようなアンコンシャス・バイアスに気づくのはなかなか難しいことですが、私は、様々な境遇の人が主人公の小説を読んだり、映画を見たり、芝居を見たりすることも、気づきを促すという点では非常に重要なのではないかと思います。

ダイバーシティ、多様性という言葉はすでにもう言い古された感がありますが、真のダイバーシティ推進のためには、多様性というだけでは不十分であって、インクルージョン（包摂性）も共に必要です。単に多様な人がバラバラに存在しているのではなく、お互いがお互いを尊重し合い、包摂されている状態が重要です。最近では、加えてエクイティ（公平性）の重要性が指摘されるようになりました。公平と似た言葉に平等（イクオリティ）があります。このスライドの図をご覧ください。板塀の向こうで行われている野球の試合を3人の人が見えています。左側の図は、身長が違う3人にそれぞれ1つずつの箱が「平等に」与えられています。しかし、1番右の人はその箱に乗ってもまだ野球の試合を見ることができません。

真ん中の図では、左の人には箱がなく、真ん中の人に1つ、右の人に2つの箱が与えられています。これで3人とも試合を見ることができる、という「公平性」が担保されました。さらにもっと良い状態は、1番右の図のように、板塀がフェンスになることで、これにより、箱がなくても3人ともが試合を見ることができます。つまり、平等（3人とも箱がない）かつ公平（3人とも試合を見ることができる）な状態です。これを公正（ジャスティス）と言うこともあります。ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョンの頭文字を取ってDEIと言われます。

次に DEI 推進のために重要なエンパシーについてお話します。私たちは、気の毒だと思う立場の人や問題を抱えた人、あるいは自分と似たような意見を持っている人々に対して、自然に共感することができます。これは、自分で努力しなくても、自然に出てくる、感情的な共感であるところのシンパシーです。しかし、DEI 推進のためにはそれだけでは不十分であって、自分と違う理念や信念を持つ人、あるいは気の毒だと思えない立場の人々が何を考えているんだろうと想像する力、すなわちエンパシーが必要です。エンパシーは感情的なものではなくて、理性的な知的な作業と言ってよいでしょう。国籍、文化、性別、性的指向・性自認、障がい、宗教などの多様性に関することを、学問的に学ぶことによって、知識を持って多様性を理解できるエンパシーを身につけられるのです。

今、申しあげましたエンパシーは、2019年に刊行されたブレイディみかこ氏の『僕はイエローでホワイトで、ちょっとブルー』で言及されて注目されるようになりました。シンパシーもエンパシーも日本語では「共感」と訳されることが多かったために、十分な理解がなされていない側面がありましたが、ブレイディ氏の解説は明快で、先ほどに申しあげました通り、シンパシーは、かわいそうだと思ったり、孤独を感じている人と一緒にいてあげようとする感情や行為ですので、訓練は必要ありません。しかし、エンパシーは他者を理解しようとする想像力を働かせることができる能力です。その能力を獲得するためには、学問的な訓練も必要です。『僕はイエローでホワイトで、ちょっとブルー』は、アイルランド人と結婚してイギリスで暮らしている著者が、息子の中学校生活を綴ったエッセイです。この題名は、中学校で、ブルーが憂鬱の意味だと習った著者の息子が、ノートの端に落書きのように書いていたフレーズだということです。彼はイエロー（日本人）であり、ホワイト（アイルランド人）であり、そして、ちょっとブルーな気分だというわけです。つまり、彼は、すでに人種差別＝レイシズムの問題にも直面しています。

この本の中に、ダイバーシティ、多様性について、母子の印象的な会話があります。スライドに掲げたものですが、読み上げてみます。

「でも、多様性っていいことなんでしょ？ 学校でそう教わったけど？」

「うん」

「じゃあ、どうして多様性があるとややこしくなるの？」

「多様性ってやつは、物事をややこしくするし、喧嘩や衝突が絶えないし。そりゃないほうが楽よ」

「楽じゃないものが、どうしていいの？」

「楽ばかりしていると無知になるから……多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすから良いことなんだと母ちゃんは思う」

ブレイディ氏が言うように、多様性は確かに「面倒くさい」ところがあります。多様性がない、似たような境遇、背景、考え方を持つ人たちだけで成り立っている集団は、反対意見もあまり出ず、最初は物事がスムーズに進んでいくかもしれません。しかし、自分たちこそが正しいと思い込んでしまい、他を知らない、無知である故に、危険な排他的思想に傾きやすく、危機に対しては非常に脆弱です。繰り返しになりますが、

社会のリーダーになっていく皆さんにこそ、広い視野を持ち、多様性、公正性、包摂性を推進していくべきことを伝えたいと思いました。

なぜなら、ダイバーシティ推進には力が必要だからです。マジョリティ特権に気づき、マイノリティの権利も考えられるリーダーになってほしいと思います。

マジョリティとは多数派で、意識しないまま特権を与えられています。たとえば、足に障がいがない多数派は階段があっても何の問題もなく昇り降りできますが、車椅子利用者はそれができません。マイノリティ（少数派）は、何かを行おうとするスタート地点からハンディを負わされているわけです。

東飾葛高等学校・中学校というこの場には、大体同じような境遇、同じような背景を持った人たちが集まっていて、マジョリティ、マイノリティを意識することはあまりないかもしれません。でも、ほんの少し、先ほどお話ししたエンパシーを発揮して、マイノリティを見えない存在としてしまうのではなく、その存在へ意識を向けてほしいと思います。たとえば、日本にいる日本人でない方々について意識を向けることが、多文化共生・国際理解につながりますし、また、ジェンダー平等について、男性と女性は、数としては半々なので、マジョリティ、マイノリティという言い方はおかしいとも言えるわけですが、たとえば政治家は一高市早苗さんが首相になりましたけれども一男性が圧倒的に多いので、政策決定の場では女性は少数派で、女性の意見はなかなか反映されないということになります。

次の SOGI、これは、性的志向 Sexual Orientation・性自認 Gender Identity の頭文字を取ったものですが、その多様性への認識も重要です。心と体の性が一致していて、異性を好きになる、というのがマジョリティですが、それ以外の多様なあり方を無視してよいものではありません。そして、障がいのある人の困り事とその支援についても思いを巡らす必要があります。

このスライドは、障がいの捉え方の変遷についての紹介です。たとえば、足が不自由な人はなぜ自由に目的地に行けないのか？という問いに対し、図にあるような車椅子利用者を考えてみますと、自分の足で歩けないから、という答えは、障がいは心身の中にある、その人に原因があるとする考え方で、医学モデルと呼ばれます。一方、高層階に行く手段が階段しかないから、という答えは、障がいは社会と個人の間にある、つまり本人に原因があるのではなく、社会との間にあるとする考え方で、社会モデルと呼ばれます。医学モデルでは、自分の足で歩けるようにリハビリしなさい、それが無理で車椅子で行けないなら、行くこと自体をあきらめなさい、ということになってしまいますが、社会モデルでは、階段をスロープに変えることで、あるいはビルの中ならエレベーターを設置することで、車椅子利用者も移動が可能になります。このように、医学モデルから社会モデルへ、障がいの捉え方は変わってきました。2016年の障害者差別解消法は、社会モデルの考え方に基づいて、学校や企業に合理的配慮を求めています。

なんだかとても偉そうにお話しているのですが、私自身もマジョリティ側の人間で、気づかないことが多くあります。今でも鮮明に覚えているのですが、大学に入ってすぐ、盲学校の先生が書いた、岩波新書の『目も見えぬ子』という本を読んだんですね。戦時中、ストーブ用の石炭の配給が制限されるようになると、お

国の役に立たないということで、盲学校は真っ先に配給を止められてしまいます。すると、教科書が読めなくなってほとんど困った、というのです。これはどういうことか、すぐお分かりになりましたか？ 盲学校では点字の教科書を使っていますので、手が冷たくかじかんでしまって、指先の感覚がなくなると、教科書が読めなくなるというわけです。盲学校では点字の教科書を使っているということは、知識としてわかっていましたし、寒いと手がかじかんで指先の間隔がなくなるということも経験的に知っていましたが、だから、寒い教室では教科書が読めない、と、それらを結びつける想像力が私には欠けていました。本当に恥ずかしく、皆さんに偉そうにお話する資格はないのです。私も想像力が十分ではなく、気づけないことが多いのですが、だからこそ、少しでも気づく努力をしよう、と自分の反省も込めてお伝えしたいと思います。

2020年4月から4年間の学長をつとめた時に、私は、今お話したような、ダイバーシティ推進を学内の政策の最重要課題に挙げました。150年の歴史始まって以来、初めての女性学長ということで、自分も大学運営という世界の中ではマイノリティでしたから、マイノリティに目を向けることの重要性を言い続けなければならないと感じていたわけなんです。

その政策の中で、ダイバーシティ教育の実践として、「同志社の良心とダイバーシティ」という全学共通の教養科目を新しく設置しました。リレー形式で複数の先生がさまざまな分野から話をする授業科目なのですが、私はその中で、「文学からダイバーシティを考える」というテーマで1時間を担当しています。ここからは、その授業でお話している作品の一部を紹介していきたいと思います。

一つ目は、ジェンダー平等の観点から、松田青子さんの『女が死ぬ』という短編集です。随分強い響きのタイトルですが、ユーモアにくるみながら、私たちが持っているアンコンシャス・バイアス、特に女性に関するアンコンシャス・バイアスを鋭くあぶり出す作品集です。

この中に収められている小説に「男性ならではの感性」という作品があります。その冒頭はスライドの通りです。

男性ライターが男性ならではの感性で提案した男性向けの新商品は、世間に驚きを持って迎えられた。男性ならではの感性で開発された商品だとネットや雑誌でも次々と紹介され、まずまずどころではない話題性を生み出し、まずまずどころではない売り上げを記録したのである。世の男性という男性が、こぞって男性ライターの開発した商品を買いに走った。社会現象とも言える大ヒットに一番驚いたのは、ほかでもない、男性ライター自身であった。

この時流に目をつけた急進的な男流作家たちは、これからは男性の時代であると、男性誌で連載しているエッセイで次々と取り上げた。男流作家たちは、男性ならではの感性が世間に影響を与えた例をほかにもいくつか挙げることで持論を補強し、男性の社会進出の重要性を訴えた。

電車の中吊りには、男性ならではの視点がターニングポイントに、と大きな見出しがつけられた。男性ライターのインタビュー記事が掲載されたビジネス雑誌の広告が、強すぎる空調にひらひらと揺れていた。広告の右下では、男性ライターが不自然な斜めのポーズで微笑んでいた。

男性ならではの感性など信用できるかと渋い顔をしていた経営陣も、これには態度を軟化させるしか

なく、男性ならではの感性も捨てたものではないというスタンスに徐々に移行していった。常日頃、所詮は男性だろうという表情を常に顔に貼りつけて男性ライターと接してきた者たちが、それは違うわたしですとばかりに笑顔で近づいてくるのを見て、手のひら返しとはよく言ったものだと、男性ライターは感心した。つまり、男性ライターは社会で認められたのである。

男性ライターの成功は、社会に様々な変化をもたらした。

「男性の感性的にはどう？」

「男性ならではの感性が我々には欠けているのでは？」

「ちょっと待ってください、男性の意見も聞きましょう」

そういったフレーズが日本中の会議で飛び交うようになった。

会議中最低一度はこの言葉を繰り返しておかないと、参加している面々は不安にかられ、誰かが上手い具合にこの言葉を会話に組み込み消化してくれると、皆ほっと胸を撫で下ろした。

男性の意見を積極的に取り入れる態度が全国の職場で流行した。男性が活躍している職場は大きな売りとなり、先進的なイメージを確保することができ、社会で愛された。男と書かれた商品は売れた。男とタイトルに書かれた本は売れた。街中に男というフレーズがちりばめられた。男性は特別扱いされ、男性であることを様々なかたちで強調された。

いかがでしょうか。とても違和感があったのではないのでしょうか？この小説では男性をもてはやしているようで、それは表層的なもの、上辺だけのものであって、一過性の流行に乗って、とりあえず男性の意見を聞いているポーズを取るといった、アリバイ作りのなところが見え見えます。男性に対して非常に失礼な感じがしないでしょうか？しかし、この小説の「男」「男性」を「女」「女性」に置き換えたものが現状です。

ダイバーシティ推進が流行のようになって、女性尊重の雰囲気が出てきてはいますが、それは表層的なもの、上辺だけのものに過ぎないのではないか？という疑問を、この小説は私たちに鋭く突きつけているように思います。言葉は社会の実態を映しますので、少数派が取り立てられる傾向にあります。つまり、一般に女流作家とは言いますが、男流作家とは言いません。女性ライターとは言いますが、男性ライターとはあまり言いません。女性ならではの感性、女性ならではの視点とは言いますが、男性ならではの感性、男性ならではの視点とは言いません。その現状を、この小説は逆に表現してみせ、そのことによって、現状のおかしさに気づかせようとしているのだと思います。実は少し前、女性ならではの感性という言葉が話題になりました。2023年9月13日、当時の岸田首相が記者会見で、過去最多に並んだ女性閣僚5人の登用について、「女性ならではの感性や共感力も十分発揮していただきながら、仕事をしていただくことを期待したい」と述べました。「男性ならではの感性や共感力」とは言わないのに、女性にだけそれを求めるのはおかしい、とSNSでも話題になり、批判されました。

あるひとりの人を見た時に、女性、男性というのは属性のひとつに過ぎず、感性や視点というものは、女性ならでは、男性ならでは、というのではなく、その人ならでは、ということになるのだらうと思いますが、皆様はどう思われるでしょうか？

次に、マイリティとしての障がい者に焦点を当てた作品として、市川沙央の「ハンチバック」をご紹介します

す。この作品は、2023年7月に発表された第169回芥川賞を受賞しました。作者は、先天性ミオパチーという難病のため、人工呼吸器や電動車椅子を使って生活しています。この受賞作の主人公は、作者自身が投影されたとおぼしき重い障がいのある女性で、右の肺を押しつぶすような形で、背骨が極度に湾曲しているという設定です。この小説で特に話題になり、書評などでも多く取り上げられたのは、主人公が健常者を前提とした読書文化の特権性を糾弾する場面です。

厚みが3、4センチはある本を両手で押さえて没頭する読書は、他のどんな行為よりも背骨に負荷をかける。私は紙の本を憎んでいた。目が見えること、本が持てること、ページがめくれること、読書姿勢が保てること、書店へ自由に買いに行けること、——5つの健常性を満たすことを要求する読書文化のマチズモを憎んでいた。その特権性に気づかない「本好き」たちの無知な傲慢さを憎んでいた。

私自身、紙の本を愛し、読書に耽溺してきました。読書に熱中している時、本が持てない人のこと、ページをめくれない人、読書姿勢が保てない人のことに思いを馳せることはできず、この部分にはハツと胸を突かれました。

次に SOGI (Sexual Orientation / Gender Identity) の多様性に関して、中山可穂の小説を紹介します。中山可穂は女性同士の恋愛を描くことの多い作家です。「白い薔薇の淵まで」は、川島とく子と山野辺墨という女性同士の悲恋を描いています。その中に印象的な一節があります。

墨が男だったらとか、自分が女でなければとか、思ったことは一度もなかった。わたしは自分の性を肯定するように墨の性も受け入れ、愛した。性別とはどのみち帽子のリボンのようなものだ。意味などない。リボンの色にこだわって帽子そのものの魅力に気づかないふりをするのは馬鹿げている。自分の頭にぴったり合う帽子を見つけるのは、実はとても難しいことなのだ。東京じゅうの帽子屋を探して歩いてみるといい。百個に一個あるかどうかだ。だから、これだと思う帽子が見つかったときは、迷わず買ってしまったほうがいい。リボンが気に入らなかつたら取ればいいのだ。肝心なのは宇宙の果てで迷子になったとき、誰と交信したいかということだ。

これは同性愛も一つの自然な恋愛の形であることをヒロインに語らせているところです。次の箇所では、周囲の無理解と、異性愛者には保証されている権利が保障されていないという、少数者の困難が語られています。

「川島くんでも男に溺れることがあるんだね。」

会社の飲み会の時、直属の部長にしみじみ言われて、面食らったことがある。

「は？わたし、そんなふうに見えましたか？」

「その男と結婚するの？」

こう聞かれるのが一番困る。セクハラ親父め、と腹の中で罵倒しながら、曖昧に笑ってごまかすしかない。

「いいえ、べつに。」

「結婚できない相手なの？」

わたしは不意に悲しくなった。墨のことを誰かに話したくてたまらないのに、誰にも言えない。どんなに好きでも、私は墨とは結婚できない。子供も作れない。一生誰にも祝福されずに閉ざされたまま生きてゆくのか。

部長、それセクハラですよ、と誰かが釘をさしてくれたおかげで、この話題は立ち消えとなり、わたしは救われた。でもこのことはそれから時々考えることになった。たとえばここがアメリカなら、ニューヨークなら、価値観の多様化した世界の先進都市なら、上司にこんなことをきかれて嫌な思いをすることはないだろう。

市長が同性愛を告白したり、副大統領がゲイ雑誌の表紙を飾るところでなら、墨と堂々と手をつないで、胸をはって、傘の下に隠れなくてもびったりと寄り添いあって生きていけるのではないだろうか、と。

2023年6月に、「性的指向及びジェンダー・アイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」通称 LGBT 理解増進法が施行され、「白い薔薇の淵まで」が書かれた時とは少し状況が変わっている面もありますが、この法律にも当事者から批判が出ており、まだ充分とは言えません。さらに、皆さんよくご存知のように、アメリカには揺り戻しが来ていて、今の大統領は、性別は2つしかないと断言し、同性婚も認めない立場であり、DEI 推進政策が否定される中で、性的マイノリティの置かれた立場はますます厳しい状況になっています。私たちがひとつとしてではなく、我がこととして考えなければならない問題だと思います。

最後に、多文化共生・国際理解の観点から作品を紹介します。

グレゴリー・ケズナジャットさんは、実は同社大学大学院に在籍していたことがあって、私の授業も選択してくれていました。グレゴリー・ケズナジャットの「鴨川ランナー」は、デビュー作にして京都文学賞受賞作品です。最新作の「トラジェクトリー」は、前回、第173回芥川賞候補作となりましたが、173回は受賞作なしで終わりました。残念でしたが、ここではデビュー作を紹介します。この小説は主人公が「きみ」と二人称で書かれているところが特徴的です。「きみ」は英語講師として関西にやってきます。京丹波の田園における講師生活を経て、京都市内に居を移します。その日常が淡々と描かれますが、日本人と外国人の間をさまよう心情を丹念に描いています。「鴨川ランナー」からいくつかの場面を紹介します。

まず、英語講師として勤める中学校での様子です。

——オー、ユー・ジャパニーズ、オッケー？

——京都のサマーは熱いやろ、ホット、ホット。

どうやら英語があまり得意でない小谷先生は、僅かな単語力を振り絞って声をかけてくれる。話してく

れただけできみはありがたいが、それでも違和感を禁じ得ない。日本語で話しかけてくれたら、たとえ幾分の意味が伝わらなくても、きみはなんとか対応できるはずだ。しかし、今まで読んできた教科書の中に、この英語交じりの日本語への対策はどこにも載っていなかった。

ここでは、勤務先の先生との会話で抱く違和感が描かれています。次には、街で抱く違和感を表現した箇所を引用します。

地元で日本語を勉強していたときに予想できなかったのはこの視線だ。町のどこに行っても、自分を観察する視線を常に浴びる。もし東京や大阪、外国人が大勢いる大都市に派遣されたのなら、ここまで珍しがられることはなかったかもしれない。だが知っている限り、八木に在住する者には、きみのような外見をしている人間は他に一人もいない。じろじろと見られることは無理もないだろう。別にいじわるな観察ではない。むしろ優しさと好奇心と、いさか同情のようなものに満ちていた。ただ、きみはその視線にどのように反応すればよいか分からず、困ることもある。(中略) 挨拶を言ってもただ不思議な表情で呆然とこちらを眺め続ける相手に、どう対応すべきだろうか。

さらにその違和感は疎外感にも繋がっていきます。

時には英語を練習したがる人が街頭で君に声をかける。

——どこから来ましたか。

——道案内してあげましょうか。

——いつまで滞在されますか。

この人たちに悪意をまったく感じない。それなのに苛立ちを禁じ得ないきみは自分のことを恥ずかしく思う。彼らの発言を聞くと、認めたくない事実があまりにもはっきりと示される。ここの言葉の勉強に励んでいても、この近くに居を構えても、きみは毎日海外からこの街を訪れてくる大勢の観光客とまったく同じ目で見られていて、溶け込むことはまだ程遠いということだ。

主人公はその疎外感に耐えきれなくなって、次の契約を更新しないと決めました。

きみは次の契約を更新しないことにした。あと数ヵ月で、この街を後にしているはずだ。それまでの時間を、こうして英語指導助手たちと一緒に酒浸りで潰す。

健全な人は帰る。

帰国とか、故郷に戻るとか、そんなあやふやな意味ではなくて、自分の居場所へ帰るとのことだ。家族なりコミュニティーなり、自分を象徴でもなく、不思議なガイジンでもない、一人の人間として受け入れてくれるところに帰る。ここにいる限り、そんなことは到底ない。いつまでも一種の不思議な見せ物として扱われるのが落ちだ。

小説では、結局主人公は日本にとどまることになるのですが、「ガイジン」として味わう疎外感の強さには胸が痛くなりますし、自分自身が海外の人に対して、そのような思いを抱かせる言動をしていないか、改めて振り返りを促されます。「きみ」が感じる疎外感の根底には多数派（この小説の場合は、日本に住んでいる日本人たち）が、「きみ」を外国人として先入観、思い込みを持って、先ほどご紹介したアンコンシャス・バイアスを持って捉えていることにあり、アンコンシャス・バイアスは無意識だからこそ、なかなか気づけないわけですが、たとえば、このような小説を読むことを通して、私たちは自分の中のアンコンシャス・バイアスに気づける場合もあるのではないのでしょうか。私もつい、「日本語お上手ですね」などと言ってしまいます。その人は、本当はずっと日本で育ったかもしれないのに、見た目だけでそのようなことを言って、相手を褒めているつもりになってしまう。自分が無自覚に抱いている偏見に、この小説を読んで改めて気づかされました。

以上、大学の講義で紹介している本の中からいくつかを取り上げてお話してきましたが、その講義に対して、ある学生さんから次のようなコメントが届きました。本人の了承を得て紹介します。

日常の中で自分が当たり前のようにしていること、できることを「したくてもできない」人がいるということに常に目を向けているのはしんどいと思います。私は本を読んでいる時に、同じ体勢で紙の本を読むことができない方のことを考えながらページをめくることはできません。本を通して、さまざまな状況に置かれた人がいることを知るの大切なことだと思います。ただ、知った後、どうすればよいのか、わからなくなることも多いです。世界を一人で救えるスーパーマンではない私が、ただの大学生の私が、路上で寝そべる人や四肢の曲がった人をまっすぐ見つめられない私が、何をすればいいのかわかりません。「助ける」「支える」と考えることも傲慢なのだと思います。ただ、苦しみを見て何もしないことはしんどいです。また、誰かの苦しみを見ることで、「特権」があることをどこかで責められているような気がしてしんどいです。ダイバーシティのことを考えると、今までは気にしなかったような誰かの発言に「差別」が見えて、指摘できない自分に情けなさを抱くとともに、なんだか私の言動すべてが誰かを傷つけている気がして、自分が良かれと思ってやっていること、誰かのためになると思って進んでいる道が間違っている気がして、ふと苦しくなります。

以下は省略しますが、私自身、今日も本当に偉そうにお話ししてきてしまったのですが、ダイバーシティの課題に向き合う時、自分の傲慢さや利己的なエゴイスティックな考え方など、自らの醜悪さを否応なく突きつけられ、罪悪感や無力感に打ちのめされて絶望することがしばしばありますので、この学生さんのコメントはしみじみ胸に迫り、思わず涙してしまいました。でも、たったひとりでも、学生さんが問題に真摯に向き合い、苦悩しながらこのようなコメントをくれたことは、教員としてはとても嬉しく、この科目を設置した甲斐があったと思いました。

私たちの大部分は「世界を一人で救えるスーパーマン」ではありませんが、どんな小さなことでもひとりひとりができることから取り組んでいけばよいのではないかと思います。

さて、そろそろまとめに入ります。私にとって東葛は、皆さんにとっても同じかと思いますが、何よりも自由で、

でもその自由には責任が伴う自主自律の精神に満ちた場、そして多様な（もちろん境遇・背景の類似の中で、ではあります）他者との出会いを導いてくれた場です。

実は、私が今勤めている同志社大学は、教育理念の1つに「自由主義」を掲げています。それから、創立者新島襄が大事にしていた言葉に「倜儻不羈(てきとうふき)」というものがあって、これは、信念と独立心に富み、才気があって、常軌では律しがたいことという意味ですが、東葛に集う人々はまさに倜儻不羈な人々であると思います。今の自分が大切にしたいと思うことを与え、育んでくれたのが東葛という場だったのだ、まさに私の始まりの場だったのだ、と改めて思います。

最後に茨木のり子の詩を紹介してお話を閉じたいと思います。

「寄りかからず」はご存知の方も多かもしれませんが、自主自律の東葛生にふさわしい詩だと思い、最後にご紹介します。

寄りかからず 茨木のり子

もはや
できあいの思想には寄りかかりたくない
もはや
できあいの宗教には寄りかかりたくない
もはや
できあいの学問には寄りかかりたくない
もはや
いかなる権威にも寄りかかりたくはない
ながく生きて
心底学んだのはそれぐらい
じぶんの耳目
じぶんの二本足のみで立っていて
なに不都合のことやある
寄りかかるとすれば
それは
椅子の背もたれだけ

ご清聴ありがとうございました。

【質疑】

[生徒]

先生の学生時代のお話で、学問を学ぶということよりもたくさん大切なことがあるような印象を受けたんですが、現在は大学で先生をしていらっしゃると思います。そこで学問を学んでいうことを仕事にしようと思っただけとか何かあれば詳しく教えていただきたいです。

[植木朝子氏]

はい、ありがとうございます。大学に入った時は、将来、国語の教員になりたいと思っていましたね。今は、情報があふれていて、世の中にあるさまざまな職業の情報も簡単に手に入ると思うのですが、私が高校生の際は、職業の情報もあまりありませんでした。自分の身近で見ている職業として、学校の先生というものが思い浮かべやすく、それで、小学校の時は小学校の先生になりたかったし、中学生になったら中学の先生になりたかったし、高校生になったら高校の先生になりたかった。大学に入って、中学・高校の教員になろうと思って、採用試験の勉強もしていました。ご質問くださったきっかけというのは、やはり卒業論文ですね。皆さんの進む学部によっては、卒業論文がないところもあるかと思いますが、国文学科では、卒業論文が必修でした。その時に、調べても調べてもわからない、ひとつわかったと思ったらまたわからないことが出てくるのですが、それを追求していくのが、面白くなったということはありません。それで、もう少し勉強したいと思っただけで、ある劇的な出来事があったというわけではないんです。自分の課題に取り組んでいく中で、もう少し知りたい、もう少し知りたいと思って、学生時代がどんどん伸びていった感じです。すみません、あまりお答えになっていないかもしれませんが、それで最終的に大学の教員になりました。

[生徒]

今回の講演会で多角的な視点とか多様性についておっしゃっていたと思うんですけど、普段から自分自身もそれについて考えてはいるのですが、やはり難しいと感じる部分があって。今この東葛っていう高校に通って、で、高校生として何かそれを、その能力を身につけるために、高校生である僕たちが何かできることってというのはあるのでしょうか。それについて聞きたいです。

[植木朝子氏]

はい、ありがとうございます。私も自分が高校生の時のことを考えたら、もう自分のことで精一杯でした。ですから本当に難しいと思うんですけども、よく、経験至上主義というか、実際の経験をすることが大事で、机上の空論は意味がないみたいなことを言われがちなんですけど、一人の人間が経験できることは非常に限られていると思うので、今日もお話したように、本を読んだり、映画を見たり、お芝居を見たり、虚構の世界であっても、さまざまな人生があるんだということを知るだけでも、それは大事なことだと思うんですね。皆さんも多分自然に、本を読んだり映画を見たりされてると思うんですけども、そういう経験を通して、多くを学べると思います。大学に入ってから、多様性について、またそれぞれの分野で、例えば法律の面から考えると、医療の面から考えると、広がっていくと思います。高校生の皆さんが、色々な行動の

制約もある中で、全然違う環境の人と触れ合うというのも難しいですよね。今、質問して下さったような意識を持っているだけでも素晴らしいです。今日ご紹介したような小説でも、また、マイノリティ当事者が書いた本もありますから、そういう本を読むことを私はおすすめします。

[生徒]

本当に大した質問とかじゃなくて、もう本当に先生のお話聞いて、もうめっちゃくちゃ感銘を受けて、なんか、例えばその本とかで、「僕はイエローでホワイトで、ちょっとブルー」とか、私興味があって読んだことはあったんですけど、なんかそこまで深く考えたことがなくて。で、なんか先生の考え方っていうのをすごい惹かれて、何か先生が人生いま、いままでは東葛であったこととか、後の思いとか色々お話していただいたんですけど、その中でも長い事を通して何か一番大事にしていることは何かありますか。

[植木朝子氏]

ありがとうございます。難しい質問ですけど、いろんな人と出会うということが大事だなと強く思います。多様性といっても、本当に自分とかけ離れた、たとえば海外の人とか、そういうすごく違う生活や文化じゃなくても、東葛に集まっている人たちの中でも、それぞれ考え方が違うと思うので、そういう人たちと出会っていること自体とても大事だと思うんですね。皆さんはコロナの時はどういう年頃だったのかな。自分のことを言ってしまっただけで恐縮ですが、私が学長になった2020年4月は、ちょうどコロナで緊急事態宣言が発出されてしまった時なんですね。それで、大学を閉めなければなりません。思い出すと今でも涙が出ますが、学生さんたちが大学に来られず、人と出会うことができなかつたんです。コロナ禍の中実施された2022年の高校野球で、優勝した仙台育英高校の須江監督が、「青春って密だから」とおっしゃった言葉が話題になりましたね。「青春は密」なのに、コロナで密はだめと言われた生徒たちが、つらい中、頑張ってくれたという文脈でしたが、私も東葛生だった時の密な青春を思い出しました。密な関係、密な触れ合いが本当に大事ですから、皆さんにはぜひ、中学校生活、高校生活を密に味わい、楽しんでほしいと思います。答えがぐちゃぐちゃになっていますけれども、そんな風に思います。

[生徒]

本日は講演ありがとうございました。

この若い時にこう、多様性とか、そういう自分が普段考えきれないようなことを考える機会をいただけたのは、非常に光栄な体験だったと思うんですけど、その中で先生が高校時代これやっておけばよかったなっていう後悔みたいな部分を教えてほしいなと思います。

[植木朝子氏]

後悔。これをやっておけばというよりも、なんでこんな馬鹿なことをしてしまったんだろうという後悔の方が多いです。非常に無神経な発言をしてしまったりしたこと、自分の失言を今でも覚えていて、なんであんなこと

言っちゃったのかなって。自分の本意ではなかったけれど、でも、相手がそうするのは無理もないなっていうような、変なことをいっぱい言ってしまって……。自分の言いたいことが相手に伝わらなかったのは、自分の言葉の選び方やタイミングが悪かったのであって、自分にももちろん責任があるんですけども、考えなしの行動に対する後悔はいっぱいあります。でも、それもまた仕方がなくて、そういう失敗を経て気付いて行くしかないと思うから。ご質問とだんだんずれてしまったのですが、もし、高校時代をやり直したとしても、もうやり直したくないけど、やり直したとしても、同じようなことをしてしまうんじゃないかなと思います。そのような、愚かな自分も愛しいというか…。まとまらなくて、すみません。

【生徒代表御礼の言葉】

[生徒代表]

植木朝子先生、本日はご多忙の中、私たちのためにご講演を賜り、誠にありがとうございました。先生は本校の57期生ということで、かつて私たちと同じようにこの東葛で日々学ばれた方であられると思います。そんな先生に創立100周年という節目の年にお話ししていただけることを、在校生一同、心から光栄に思っております。本日のご講演「私的東葛論：始まりの場として」では、先生の過ごしたこれまでを踏まえた、とても興味深いお話でした。前半のお話では、人生は学びであり、どんな些細な出来事からも広い視野を持って過ごすことで学べることは多くあるのだという印象を受け、学びを通して疑問を問いかけることのできる、自分自身がリーダーになるということに対する、考えさせられるメッセージをいただきました。後半の作品紹介のお話では、特に「女が死ぬ」という小説のお話が印象に残っています。リーダーになっていく私たちは、これからどのような過ごし方が求められるのかに対するこれからの考え方や、現状の社会の問題、ダイバーシティやアンコンシャスバイアスのお話など、まだまだ未熟な私たちに寄り添っていただける、アドバイスになるようなお話をいただき、人生における重要となるこの3年間を東葛が学ぶ意味や価値というものを改めて考えさせられました。講演の内容1つ1つが、これまでの100年間を築いてこられた方々への感謝を強く感じられ、そしてこれからの100年を生きる私たちへの力強い励ましとして胸に響きました。東葛は創立以来、自主自律を校是としました。自ら考え、判断し、行動することを、それぞれが自分の意思とかを把握しながら行く、その精神こそが東葛の伝統と言えるのだと思います。そして、その伝統は受け継ぐだけでなく、新たに創造していくものでもあります。だからこそ、時代を重ねるごとにその重みを増し、私たちひとりひとりの醸成が伝統そのものを作っていくのだと思います。私たちは、これまで受け継がれた伝統を大切にしながらも、次の100年へ向けて新たに歩みを進めていかなければなりません。この瞬間から始まる次の100年を形作る礎となれるよう、この先の東葛の歩みを自分たちの力で刻んでいけるよう、すべての生徒が深い学びをつくる場所としてふさわしいものになるよう努力していきます。これからも、本日のお話を胸に、それぞれが始まりの場としての東葛、自主自律の精神を生かしながら歩みを進めていきたいと思っております。改めて、本日は素晴らしい講演をいただき、誠にありがとうございました。

令和7年11月7日生徒代表



以上